



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

### 創晶

2007年秋、大阪大学発のベンチャー企業である株式会社創晶は、製薬企業から次々と舞い込む困難な結晶化の依頼に対し、タンパク質で65%、有機低分子<sup>1</sup>で80%という極めて高い成功率を叩き出していた。製薬企業からの結晶化の依頼は増え続ける一方であった。そして、第二事業年度での黒字達成を果たした。大学発ベンチャーとしては異例中の異例である。

その技術は、大阪大学大学院工学研究科の佐々木孝友研究室で培われたものであった。社長には、佐々木研究室のOBである安達宏昭が就任した。安達は、一度は大手企業に就職したもの、サラリーマン生活を辞めて、自身の原点である大阪大学に戻ってきていた。安達は、2002年に「創晶プロジェクト」に参画し、新機能結晶の開発やタンパク質の研究者との連携により、有機物やタンパク質などの結晶育成が難しい材料の新しい結晶育成技術の実用化を牽引し続けていた。

しかし、社長の安達は満足していなかった。さらなる顧客満足を得るためにどうすれば良いのか常に自問していた。「結『晶』を『創』製する」、「あらゆる化合物の結晶化は創晶へ」、「不可能へのあくなき挑戦」、それが彼の思い描く未来予想図である。

### 異分野との連携、「非常識」との出会い

2000年秋、大阪大学大学院工学研究科の助教授であった森勇介は、同研究科の佐々木研究室において、有機物や酸化物の結晶化技術に関し、これまで相当な成果を上げてきた。一方、それ故、今後の研究者としての人生を思い描いたとき、漠然と目標を見失いかけていた。

なんとなく雑誌のページをめくっていた森は、タンパク質の結晶化に関する記事に目が止まっ

<sup>1</sup> 低分子は分子量の小さい分子を指す。通常、分子量1万未満のものをいう。反対に、高分子とは分子量の大きな分子のことを指し、分子量1万以上のものをいう。また有機物、つまり有機化合物は炭素を含む化合物と定義されている。有機化合物とは、炭素原子を構造の基本骨格に持つ化合物の総称である。

本ケースは、クラス討議のため、インタビューならびに公刊資料をもとにまとめられたものであり、経営管理に関する適切なあるいは不適切な処理を示すことを意図したものではない。本ケースは、上原啓嗣、緒方是嗣、久保陽一、末永京子、高橋明子、直場俊樹、宮崎太が作成し、慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授中村洋が監修を行った。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp)。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法(電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない)による伝送も、これを禁ずる。